ほない歴史通信

第１１８号

2026(令和 8).3.1

「いはらき」新聞から戦争時代の大子を知る

明治二四年（一八九一）七月五日に創刊された「いはらき」（現茨城新聞）は、茨城県内外の情報を伝える地方紙として、長い歴史を持っています。紙面に掲載された様々な記事は、後世に生きる私たちにとって、過去の茨城県内外の出来事を記した貴重な記録でもあります。そこで、私たち大子町歴史資料調査研究員は、「いはらき」新聞に掲載された大子町関係記事の収集に努めており、史料集の編纂を進めてまいりました。そしてこのたび、「いはらき」新聞に掲載された昭和一三年（一九三八）から同二〇年までの大子町関係記事の表題を年代順にまとめた『大子町関係「いはらき」新聞記事表題索引目録（三）』が完成いたしました。

『大子町関係「いはらき」新聞記事表題索引目録（三）』は、明治二四年（一八九一）から大正一二年（一九二三）の記事を対象にした（一）、大正一三年から昭和一二年（一九三七）の記事を掲載した（二）に続くものです。本史料集が対象とする昭和一三年から二〇年という時代は、日中戦争が本格化し、日本が米英開戦へと突き進む戦争の時代でもありました。国民の多くが戦地に赴き、銃後の暮らしも戦争一色に染まっていく中、大子地域も戦争とは無縁ではいられませんでした。

本史料集には、当時の「いはらき」新聞の表題がまとめられており、それを眺めるだけでも当時の世相が伝わってきます。連日「増産」や「挺身」の文字が並ぶ記事の中から、奥久慈の資源である木材や炭、太平洋沿岸地域での石炭の増産に励む「山の戦士」の活躍が報じられています。また、当時の大子地域ならではの動きである、満洲への分村移民や他地域から疎開をしてきた人々の受け入れ記事も見られます。徐々に戦況が悪化してくると、連日のように大子地域出身の戦死者が紙面に名前を見せるようになります。

このような表題索引目録を手がかりに、過去の「いはらき」新聞の記事を閲覧すると、当時の世相をより具体的に知ることができます。過去の「いはらき」新聞記事は、水戸市内の茨城県立歴史館などでご確認いただけます。

『大子町関係「いはらき」新聞記事表題索引目録（三）』は冊子の形での販売は行っておりませんが、大子町ホームページ内で公開しています（閲覧先は下記二次元コードをご参照ください）。また、表題索引目録（三）の公開に合わせ、すでに刊行されている表題索引目録（一）・（二）の電子公開も始めました。これらは、記事表題の文字検索も可能なので、目当ての記事を探しやすくなっています。インターネットでの閲覧が難しい方向けに、大子町立中央公民館内歴史資料室・図書館「プチ・ソフィア」（大子町立中央公民館別館図書室）に印刷したものを配架しているので、そちらもご利用いただけます。

戦後八〇年を過ぎた今、戦時中の大子の姿を体験された方はごくわずかとなってきています。そうしたなか、本史料集を通じて出合う「いはらき」新聞の記事は、戦争時代の大子を語る貴重な証言となります。多くの方にご利用いただけることを心より期待しています。

（藤井達也）

『大子町関係「いはらき」新聞記事表題索引目録（一）～（三）』掲載先二次元コード

消えかけていた茨城のわさびを守りたい

石塚和人

大学を卒業後、ＩＴ企業に入社し社会人として歩み始めましたが、次第に社会とのズレを感じ、農業の道へ進むことを決意しました。知識も経験も土地もない状態からの挑戦で、当初は右も左も分からず、作りたい作物さえ定まらないまま漠然と農業に向き合っていました。そんな中、静岡県有東木のわさび栽培の風景に出会い強い感銘を受け、そこからがむしゃらに歩み続けた末、茨城のわさびと出会いました。

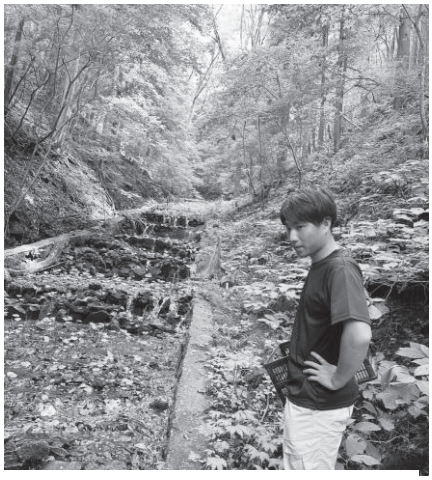
はじめて本物のわさびに出会ったとき、その栽培方法に大きな衝撃を受けました。山あいから湧き出る澄み切った清流。その水に守られるように、等間隔に静かに植えられたわさびの株を目にした瞬間、なぜか言葉にならない感情が込み上げ、気づけば涙が出ていました。人工的な設備に頼らず、自然と共に生きるようなその姿に、心を強く揺さぶられたのを今でもはっきり覚えています。そのときの感動こそが、今こうしてわさび栽培に向き合っている自分の原点です。

清流に手を入れると、指先がしびれるほど冷たい水が流れています。その冷たさを感じながら、一株一株と向き合う日々は決して楽ではありません。天候や水量に神経を使い、落葉や石の管理にも手間がかかります。それでも、不思議と心は前向きになります。自然の中で、自分の手で育てているという実感が、日々の苦労を上回る充実感を与えてくれます。

茨城にわさびがあることを、どれだけの人が知っているでしょうか。正直に言うと、県内の方からも「茨城でわさび？」と驚かれることが少なくありません。しかし、実際にこの土地に立つと分かります。ここには澄んだ水があり、山があり、わさびが育つための条件が確かにそろっています。わさび栽培を通して伝えたいのは、「茨城には、まだ知られていない価値がたくさん眠っている」ということです。派手さはなくても、手間と時間をかけて育てたわさびには、胸を張れる味と物語があります。その存在を、まずは茨城県民の皆さんに知ってもらいたいと強く思っています。

もちろん、不安が全く無いわけではありません。年々変わる気候、思うように定まらない販路、収益の見通し。わさび栽培は決して簡単な道ではなく、「この先も続けていけるのだろうか」と考え、眠れない夜を過ごすこともあります。それでも、山の奥で静かに流れる沢と、そこに広がる荘厳なわさび田を前にすると、自然と「これが自分のやりたいことだ」と思えるのです。この不安も含めて、今の自分たちのリアルであり、逃げずに向き合うべき現実だと感じています。

これからの野望は、とてもシンプルです。茨城のわさびを「知っている」存在から、「食べたい」「応援したい」と思ってもらえる存在にすること。そして、いつかはわさびをきっかけに人が集い、茨城の山や水、その魅力が自然と伝わっていく場所をつくることです。わさびは主役でありながら、同時に茨城の自然を語る語り部でもあります。ここ茨城に確かに存在するわさびの価値を、これからも背伸びせず、等身大の言葉で、前向きに伝え続けていきたいと思います。



わさび田（上野宮）と筆者

（大子町農林課　地域おこし協力隊）

大子百銘山とは⁇山城と要害⁉

益子　要

私は大子山岳会の一員として、大子やその周辺の山々を登っています。しかし、近年ふとしたきっかけから、山に残された城の痕跡に気が付くようになりました。登山愛好家である私が、どのように城の世界と出会ったのかを紹介します。

以前、大子に百名山を創ろうと考えました。故鈴木三郎氏作の『醍醐百名山』という随筆本には百名山と云いながら四一座しか載っていません。しかも、上郷の方なので北側にやたら偏りがあります。それなら、上小川生まれの私が南側の山を五九座足して本当の百名山にしてやろうと、選定を始めました。ところが男体山、長福山をはじめとして二〇座位を越えると、途端に百名山候補を選ぶのが難しくなります。『醍醐百名山』には城山も結構あることから、茨城城郭研究会の余湖氏や青木氏などの城郭ＨＰを参考に多くの城山を追加し、「令和大子百銘山」を選びました。

「令和大子百銘山」を選ぶ中で、対象の城山を実際に訪れました。平成二九年に塙の城山、鏡山、下津原要害。翌年、鎌倉山、野瀬愛宕山、館山など登った山はすべて山城です。そうすると不思議なことに、「ここに堀切在り⊠（ます）」と看板がなくとも、山城の痕跡である堀切や切岸の存在に気が付くようになりました。山城をめぐる中で、その痕跡を見つける目が養われていったのです。

城郭愛好家の方は、地域に残る地名を苦労して探して城を見つけ出します。しかし私の場合、城に出会うきっかけは、登山をする中で、お城の方からやってきたのです。城郭愛好家の言い方だと、これは「お城に呼ばれた」と言うそうです。

私は、大子の山々を歩くなかで城の痕跡に気付くと、城郭愛好家の方（茨城城郭研究会の余湖氏、青木氏、五十嵐氏など）に情報を提供するようにしました。そうすると、城郭愛好家の方の調査も行われ、これまで知られていなかった大子の山城が次々と見つかることになりました。その具体的な例を紹介します。

郷土史家の飯村尋道氏の本を読み、各地区の天道山と愛宕山のことを学び、平成三一年二月に袋田の天道山に向かいました。龍泰院裏から登り、水戸生コンに向かって縦走します。三角点を過ぎ、しばらく行くと突然に堀切が出現しました。お城発見です。もちろん未知の城で、愛宕神社の手前にありました。情報を余湖氏の掲示板に載せると、五十嵐氏と青木氏が調査に来られて「袋田要害」と名がつきました。堀切一本だけの小規模の砦です。

翌三月は上郷の秋葉山から町付の天道山を縦走しました。そうすると突然堀切が出現、しかも三本です。おまけに曲輪群が八溝川まで十段位続いています。これはかなり大規模な城で、「町付向館」と命名され、「大子ジャーナル」にも掲載されました。

翌令和元年四月、旗鉾山の遺構の確認を青木さんから依頼され、二基の石祠がある太郎山の先に見つけました。一本のみ「堀切在り⊠」のこの城は「大草砦」と命名されました。令和三年一月盛金峠で「盛金砦」。令和四年三月大生瀬の日照熊野神社の裏山で「日照要害」、高柴の花立山で「花立山狼煙台」を発見。茨城城郭研究会の皆さんと連携し、ここ数年でも六基の山城を発見することができました。

新たな城の発見は大子町域にとどまりませんでした。大子百銘山と並行して「茨城参百銘山」を創ったらどうかと考え、選定を進める中、昨年一月、参百銘山から格上げした「茨城伍百銘山」の日立の平沢富士を訪れたら、裏側に四重堀切を見つけました。この「平沢城」は、昨年刊行された茨城城郭研究会編『茨城の城郭四』にも掲載されています。

なお、「令和大子百銘山」は大子山岳会のＨＰで紹介しています。皆さんの住む地区の山や城跡も絶対ありますので、検索してみて下さい。

（茨城県山岳連盟　大子山岳会）

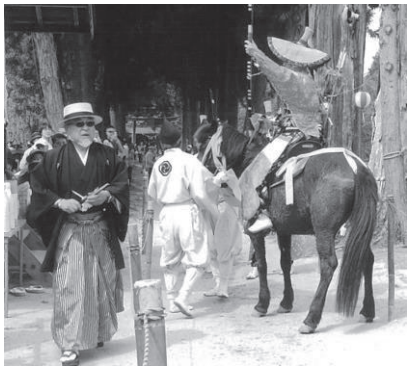
下金沢十二所神社・流鏑馬復活への道（三）

吉成英男

いま、どの地域でも、祭りを続けていくことが難しくなっていると言われています。祭りを続けていくためには、どうすればよいのでしょうか。今回の経験から、お話ししたいと思います。

私は、人生は、やるか、やらないかの二者択一だと思います。やると決めたら努力する。やれば、可能性が開けます。どうせ無理だと言ってやらないのではなく、難しいかもしれないけどやってみる。ポジティブとネガティブがあるなら、私はポジティブ、やる方を選択します。失敗したとしても、プロセスが大事です。

今回のお祭りは、仲間の絆を深めたのではないかと思います。どうせ、人も金も集まらないと言う人もいましたが、やってみたら、人も金も予想していた以上に集まりました。今回やらなかったら、永遠にできなかったかもしれません。これも、私に付いてきてくれた先輩たちのお陰です。先輩たちは、「もう見ることはないとあきらめていたが、生きているうちに見ることができてよかった」と言ってくれました。もう亡くなってしまいましたが、流鏑馬が大好きだった先輩にも、昔とは少し違うけれども見せてあげたかった。



筆者と射手（祭礼当日撮影）

お祭りにはお金がかかりますが、今回は寄付を募りませんでした。二十八年前の花代の残金が残っていて、それを使うことにしましたが、もし赤字になったときは、執行委員が自腹で負担する覚悟でした。結果的には、予想以上に花代が集まって赤字にはならず、残金は次に回せそうです。

皆さんからは、もう一回やってくれと言われていますが、これ以上はやらないつもりです。同じ人がやるのではなく、次の人たちに経験してほしい。やってみないと、この重責は分からないからです。一方で、四区ある坪から出てもらう世話人の仕事については、神社費の集金、祭礼前の境内や拝殿の清掃の手伝い、お祭りや正月用のお札などの配布に減らしました。氏子は七十軒まで減ってきていて、これ以上、減らしたくないからです。また、他の地区から引越ししてきた、若い人たちが三軒いるのですが、「氏子にならなくてもよいから」と話して、お祭りに参加してもらいました。次に繋がることを期待しています。

地域にとって大事な祭りを残すには、お金や担い手をどのように集めていくかが課題ですが、やり方次第だと思います。例えば、祭りの担い手をボランティアで募集してもよいのではないでしょうか。町にもできることはあるはずで、ぜひバックアップをお願いしたいと思います。祭りはやれば楽しいし、参加した人たちは喜びます。五感で楽しむことができ、祭りをする人、見る人の一体感が生まれます。私は、次の人たちに、たすきを渡したい。次の人たちは、今回見たものを、しっかりと心に焼き付けてほしい。幸い、地元出身で、たすきを渡せる人が育っています。その人には、今回手伝ってもらいました。

「言い出しっぺ」、リーダーには、熱量が必要だと思います。その熱量を周りの人たちが感じて動き出すのではないでしょうか。

祭りには不思議な力があります。地域をまとめる、団結させる力があります。今回の流鏑馬でも、射手が見事に的を撃った瞬間、会場全体が盛り上がった、それに凝縮されていたと感じました。

お祭りを無事終えることができ、地域の皆さんからは、「ご苦労さまでした。しみじみ、やってよかった」と言われています。

これからも、次の人たちの手によって、流鏑馬が続けられていくのを見守っていきたいと思います。（完）　（大子町下金沢在住）

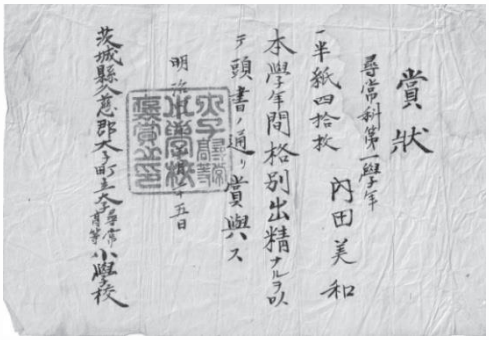
大子における内田熊蔵の足跡（その四）

内田正人

熊蔵が大子尋常高等小学校に奉職し、明治四十年（一九〇七）から大正四年（一九一五）まで八年間校長を務めた。そして、明治四十年には、私の祖父である美和（よしかず）が尋常科の一学年に入学し六年間、さらに高等科の二年間、ずっと父熊蔵が校長であった。熊蔵と長男美和、二人の足跡を辿ってみたい。

熊蔵は、明治三十二年（一八九九）に水戸藩士で学者であった北條又衛門の二女ハルと婚姻、当時北條家の戸主は北條猛次郎で、妻ハルの兄である。同年六月に美和を水戸常磐村の北條家で出産し、勤務地の久慈郡賀美村役場に出生届を提出した。

昭和七年（一九三二）に、又衛門の長男である北條重直は、当時山口県小郡女学校在職中に、『水戸学と維新風雲』を執筆刊行していたが、それを監修したのが弟の猛次郎であった。彼も水戸学の権威者で、多年教職にあり中等学生を薫陶していたのである。昭和十七年、絶版となっていた『水戸学と維新風雲』に加筆、修正を加え、北條猛次郎著『維新水戸学派の活躍』として刊行したのである。彼らは熊蔵の義兄達である。


賞状
尋常科第一學年
一半紙四拾枚　内田美和
本學年間格別出精ナルヲ以テ頭書ノ通リ賞與ス
明治四十年三月廿五日
茨城縣久慈郡大子町大子尋常高等小學校

美和は校長の息子として、勉学を頑張り、一学年では、「格別出精ナルヲ以テ」半紙四十枚を賞与された（上記史料）。さらに、成績優等として、雑記帳二冊を賞与、二年生では、綴り方帳一冊等毎年賞状や賞品を得ていた。そして、高等科に進み、一学年では、記事文精選、二学年では、硯箱、さらに茨城県からは、地図三等賞を授与された。

熊蔵は、茨城県師範学校長の高藤太一郎との交流を続けていた。そして、大正四年（一九一五）二月に熊蔵宛、県師範学校に入学志願の者三名の学業、性行及び家庭などの内申書の提出を求める書簡が届き、堀川賢明、都筑良雄、内田美和の内申の写しを残した。追伸で、美和の分は、「家庭ニ関スル項目ヲ記入セザルハ、小職ト父子ノ関係アルヲ以テ省キタル次第ニ有之候」とあった。

師範学校時代の美和は、学生寮で生活し、学業や剣道寒稽古などでは、毎年皆勤で表彰され、小学校本科正教員の免許を得た。

また、明治二十二年（一八八九）の徴兵令の特例により、卒業した大正八年（一九一九）六月には、陸軍六週間現役兵として、歩兵第二連隊留守第二中隊に入隊、七月に除隊したことが軍隊手帳に書かれていた。陸軍歩兵大佐による「国民軍幹部適任證書」において「国民軍幹部適任者ト確認ス」という証書も受け取っていた。

美和は、正教員として採用され、小学校訓導として子ども達と接し始め、父熊蔵が和歌を趣味としたのに対し、彼は教師の傍ら童謡詩人の道を歩み始めた。初等教育唱歌研究会を結成した葛原しげるに師事し、郵送された「音楽講義」の冊子で通信講義を受け始めていた。この冊子の末尾には懸賞課題が出され、自作の童謡を送ると選評し、佳作は曲譜をつけて世に公にすると書かれていた。第十一号には、佳作甲として、茨城、内田美和君「星の涙」の詩が載り、講評が書かれていた。葛原しげるは、「日本童謡社」を興し、『日本童謡』という雑誌を隔月で発行、美和は度々投稿し、ついには、鹿島小学校内に「日本童謡社水郷支部」を立ち上げた。昭和四年には、『童謡集桐の実』発刊、その後『年刊新興童謡集』、『世界音楽全集』、『日本童謡読本』などに美和の詩（童謡）は取り上げられるようになっていった。しかし、悲しいかな、校長と童謡詩人の二足のわらじは許されない軍国主義の時代へと移り、父の意見に従い、童謡詩人の道を諦めざるをえなかったのである。

（日立市在住）

金沢志奈『ふだん記本13　久慈川上流』の紹介

本書の著者は明治三十八年（一九〇五）、佐原村（当時）左貫に、吉成誠といつ子夫婦の末子として生まれた。吉成家は、江戸時代以前から続く旧家で、明治初期までは代々医業を営み、明治以降は、奥久慈茶の振興に尽力した。父の誠と次兄の仁二は村長を務めている。著者は尋常高等小学校を卒業後、東京の叔母のもとで技芸学校に通っていたが、十八歳で親たちが決めた一度のお見合いで、福島県塙町の酒造家、金沢家に嫁いだ。四男三女をもうけたが、長女を二歳で亡くし、著者が四十三歳のとき夫を亡くしている。その後、家業を守り、残された子供たちを育てあげた。

本書は、昭和四十五年（一九七〇）、著者が六十六歳のときの文集である。この年、夫の二十三回忌があり、子供たちも全て独立した。「私の勤めは終わりました。私はからっぽの脱殻（ぬけがら）です。早くお傍に呼んでください」とつぶやく著者を心配した長女が文章を書くようにすすめる。当時、長女は「ふだん記」運動に参加していた。「ふだん記」運動とは、昭和四十年代に、八王子（東京都）から全国へと波及していった庶民の文章運動で、八王子生まれの社会運動家、橋本義夫がその創始者である。歴史家の色川大吉によって紹介され、「自分史」ブームのきっかけとなった。色川は、その初期の代表作として、本書をあげている（『自分史』）。

著者は人生を振り返る。短かった娘時代は一生で一番楽しかったが、嫁いだ後は、何事も辛抱、努力、忍耐と思い、義父母に従い、夫と子供につかえ、夫亡き後は、子育てと家を守ることに夢中で、「強く強く生きることより他になかった」。著者は、文章を書くことで、亡父や子供たち、橋本や「ふだん記」運動の仲間たちに見守られていると感じ、ようやく「心の平安」を得る。

今回は、本書の中の「故郷」に関するもの（百二十九編中、四十編）を紹介しながら、著者にとっての「故郷」を考えてみたい。

まず、「故郷」の記憶である。父は子供を一度も抱いたことがないという厳格な人だったが、夜になると昔話をよく話してくれた。母は旧黒羽藩の士族の娘で、物静かな控え目の行儀正しい優しい人だった。そのほか、漢方医の祖父、優しかった祖母、「保内郷七屋敷の一つと数えられた屋敷」での暮らし、キツネに化かされた昔話、川原や田んぼで遊んだ思い出などが語られる。

次に、「故郷」の人びととの繋がりである。大好きだった次兄仁二。早くに夫を亡くした著者の力になってくれた。子供の頃から仲が良く喧嘩もした三兄仁賢。今でも「此の世に生有る限り兄妹仲むつましく暮したい」と言ってくれる。優しかった初原（隣の集落）の叔母うた。子供を連れて家出しようとしたときは、涙を流して諭された。小学校からの親友とは文通を続け、早く夫を亡くした者どうし慰め合った。六十歳を過ぎ、小学校の同窓会に出席し、思い出の人と再会する。お盆に実家を訪れ、「故郷」の人びとと話が尽きなかったことや念願の八溝山登山などが記される。

こうして見ると、苦労が多かった著者の半生は、「故郷」の記憶と人びととの繋がりに支えられていたことがうかがえる。その一方で、「昔とは大変な変わり方、最高のゼイタク豊な暮し」の反面、「人情味は、年々うすくなる」。次々と美しい自然もなくなっていき、「古里はすっかり変わってしまった」と書く（『ふだん記31』）。

著者は「文集を作ることは、その目的が自分の人生を書きとどめて残すことです。それは、限りあり、忘れ去り、消えていく自分の人生を、自分の生命を越えたものとする事になります」と書いている。著者は孫たちに、「故郷」で覚えた童謡や、父が話してくれた昔話を聞かせる。そして「孫達がやがて大人になってもきっと思い出すだろう」と願う。「故郷」が大きく変わろうとする中で、その記憶を記録として残す。それが本書に込めた著者の願いだったのではないだろうか。

（小松崎研）

懐かしき昭和の大子（七）

○大子町中心市街地（昭和四十年頃）

瀬戸田（旧大子町役場付近）の上空から大子町中心市街地を北に向かって撮影した写真である。本シリーズ第二回及び第四回で紹介した写真と同様に、商店街の催しでヘリコプターによる遊覧飛行が行われた際、故森山道和氏がヘリコプターから撮影した写真であると思われる。

写真のほぼ中央、後山の丘の上に写っているのは、大子小学校である。同校は、学制公布の翌年、明治六年（一八七三）に開校した。保内郷で最も古い小学校の一校である。校地は、当初、大子郷校文武館跡（旧だいご保育園）が充てられたが、その後の児童数増加に伴う拡張により、西側の一段高い敷地に移った。校舎は、写真が撮影された昭和四十年（一九六五）頃は、木造校舎七棟（明治四十二年に建てられた二階建て一棟、昭和初期に建てられた平屋建て五棟及び講堂一棟）で構成されていた。講堂を除く六棟は、昭和五十五年（一九八〇）に鉄筋コンクリート造り三階建ての校舎に建て替えられた。講堂は、昭和六十一年（一九八六）に取り壊され、同じ年に体育館が竣工した。その後、少子化に伴う児童数減少により、平成十三年（二〇〇一）に大子、上岡、浅川、矢田、池田の五小学校が統合し、新たにだいご小学校が誕生し、大子小学校は百二十八年の歴史に幕を下ろした。大子小学校の校地・校舎は、そのままだいご小学校として使われている。

余談ではあるが、平成五年（一九九三）生まれの私は、大子小学校最後の入学生の一人である。大子小学校校歌を歌ったのはわずか一年だけだったが、三番の最後に「学べ一千五百人」と歌ったことは印象深く、今も忘れられない。

（大金祐介）

大子町歴史資料調査研究会では、明治・大正・昭和期の写真や絵葉書を探しております。お見せいただける方は、大子町教育委員会事務局生涯学習担当までご連絡ください。

【大子町内指定・登録文化財紹介（2）】

小生瀬地蔵桜

区分・種類　大子町指定天然記念物（第二十一号）
指定年月日　平成二十六年七月一日
所在地　大子町大字小生瀬三八二七―一
管理者　小生瀬地蔵桜保存会

小生瀬の小高い丘に、竜の骨が秘蔵されたという伝説がある八竜山地福寺の寺跡があり、現在は、地元有志により子安地蔵堂が祀ってあります。小生瀬地蔵桜はその境内にあり、樹齢五百年と伝えられるシダレザクラの巨樹で、樹高は十・五メートル、根本周囲は五・一二メートルあります。四方に伸びる枝は隆々と逞しく、保存会の方々が支柱を施し、施肥や草刈りなどを行い管理しています。

また、シダレザクラの花が咲く時期には、薄暮の時間から午後九時にかけてライトアップが行われます。

〈参考文献：大子町教育委員会編『大子町の文化財（改訂版）』（二〇一六）〉

（山崎仙一）

編　集　大子町歴史資料調査研究会
編集人　藤井　達也（大子町歴史資料調査研究員）
大金　祐介（大子町歴史資料調査研究員）
小松崎　研（大子町歴史資料調査研究員）
山崎　仙一（大子町教育委員会事務局）
大金真理子（大子町教育委員会事務局）
発　行　大子町教育委員会
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
☎０２９５（７２）１１４８
発行日　二〇二六年（令和八）三月一日